

MタイムとPタイムの文化論

石井隆之
(近畿大学)

0. はじめに

人間社会を成り立たせている基本的要素を、私は次の7要素と考えている。

- (1) a. ひと (精神的存在・主体)
- b. もの (物理的存在・客体・具体的事象)
- c. とき (時間)
- d. ところ (場所)
- e. こと (政治・経済・文化など抽象的事象)
- f. ことば (言語)
- g. こころ (心理)

もちろん、政治的観点からは「法」、経済的観点からは「金」、文化的観点からは「神」なども重要な要素であると考えられるが、少なくとも(1)に挙げた7概念は基本であることに異論はないであろう。

これらの概念を、それぞれのローマ字表記の頭文字をとって、1 H、1 M、2 T、3 K というようにまとめることができる。不思議なことに、英語でも「ひと」は Human、「もの」は Matter、「とき」は Time であるから、1 Hと1 Mそして2 Tの1つは文字が一致している。

本稿では、文化論で無視されがち、というより、元からあまり発想を抱かない「とき」を取り上げ、この「とき」とかかわりを持つ1 Hおよび3 Kの事象を「とき」の角度から掘り下げる。

この「とき」については、本稿では、文化人類学者 Edward Hall が『Beyond Culture』で論じた「Mタイム」と「Pタイム」の視点を基本とする。

Mタイムとは、monochronic time で「単一的時間」、Pタイムとは、polychronic time で「多元的時間」のことである。これは時間の捉え方で、人間や文化によって異なるとされている。

例えば、Mタイム型の人、時間軸が1つしかなく、一度に1つのことしかしないが、物事は順序よく進め、約束は守り、時間に正確なタイプである。一方、Pタイム型の人、時間軸が2つ以上あり、複数のことを同時に行い、時間にルーズな側面があり、約束に遅れたりするが、人間関係を重視するタイプの人である。

具体的には、例えば、旅行をする場合、スケジュールをきちんと立てて出発するタイプがMタイム人間で、無計画に、なんとなくふらっと出かけるタイプがPタイム人間であると言える。

MタイムとPタイムの視点から、実に様々なことが言えるということを示すのが、本稿

の目的である。

1. Mタイム人間とPタイム人間

M タイムは、時間軸が1つと考える発想、P タイムは、時間軸が複数あると考える発想と言える。意識的にせよ、無意識的にせよ、どちらの発想を持っているかが、考え方や行動を決定する。

(2) a. Mタイム・・・時間軸が1つしかない ⇒ 時間を大切にする ⇒ 時間を守る

b. Pタイム・・・人間関係を大切にする ⇒ 時間軸が複数ある ⇒ 時間にルーズ

時間と人間のどちらを重視するかで、M タイム型人間か、P タイム型人間であるかが決まってくる。P タイム型人間は、そもそも人間関係を大切にし、付き合う人間の数だけ時間軸があると発想するので、人間関係を大切にする人はP タイム型となる。

1. 1. マラウイ人はP発想

マラウイという国の人たちは、世界一ゆっくり歩くとされている。マラウイ人は、ある人とある時間に会う約束をしたとする。彼らは約束の時間に、遅れがちであるという。

たとえば、途中で約束をしている人以外の人に出会うとする。その人との人間関係を大事にするので、何か話を始める。すると時間が経つ。その人との話が終わって、歩いていると、また別の人に出会う。するとまた話を始める。時間が経つ。これの繰り返しにより、最初の約束の人と出会えるのは、約束の時間を大きく遅れていることが多いという。

上記の状況から、マラウイ人は、明らかに P タイム型であるのが分かる。以後、P タイム型の人が持つ発想（考え方）を P 発想ということにする。逆に、M タイム型の人が持つ発想（考え方）を M 発想と呼ぶことにする。

1. 2. 日本人はM発想・P発想混合型

日本人はどうであろうか。一般に、日本人は約束を守る。そうしないとビジネスの世界では大問題になる。だから、時間軸は1つで、一度に1つのことに集中し、複数のことを同時にできる人は少ない。というよりも、1つのことに熱心になる傾向がある。

しかし、時間に正確に、会議をスタートさせたとしても、終わるのが予定時間よりも遅れる場合が多い。また、時間通りに遅刻せず、仕事を始めたとしても、帰社予定時間の5時を過ぎても、上司が帰らなければ、新人にとっては帰りにくく、残業してしまう傾向がある。

この点は、雇われている人は、9時から5時の契約なら、この時間を正確に守るアメリカ人のM発想とは、全く異なる。どうも、日本人は、物事の始めはM発想、物事の終わりはP発想ということになるのである。

どうしてこうなるかという、日本人は、人間関係を重視しながら、信頼も重要であると発想するからである。

例えば、新人が、ある会社に訪問し、契約を取るのに、相手側の社長の話が長くなって、しっかりと聞き、会議が予定よりも遅れていても、じっと我慢して話を聞く。この辛抱の具合を相手の社長は汲み取り、気分良く契約が進むということがある。商品の内容を重視し、議論の効率を強調する、典型的な M 発想を持つヨーロッパ人とは異なる点である。

1. 3. 人間のMP分類

人間が M 発想型か P 発想型のどちらかに分類することを「MP 分類」ということにする。ここでは、人間を MP 分類してみる。但し、文化と宗教に関わる事象は、後に論じる。

(3) a. M型人間：specialist・・・武士的・・・社員～課長・・・秀才・・・最澄

b. P型人間：generalist・・・貴族的・・・部長～社長・・・天才・・・空海

M 型人間は、決められたことはしっかりこなす。時間に正確な人間は、仕事も正確で、職人気質がある。職人的なのは specialist である。スペシャリストは技を磨くのに熱心で、その意味で武士的である。

会社においては、社員～課長のレベルであれば、職人的な集中力が重要であろう。この M 型人間がベストの形で現れたのが、秀才である。仕事の処理、問題の処理がうまいということになる。

一方、P 型人間は、時間軸の複数性から、物事の全体を見渡すのがうまい。1つ1つは雑でも、統一性のある仕事ができる。M 型の熱意がキーワードであるのに対し、P 型は余裕がキーワードとなる。その意味で、P 型人間は generalist である。人生が生まれながら余裕のあるものと決まっている貴族は P 型に属すると言ってよいであろう。

会社においても、部長から社長級になると P 型が好まれるであろう。職人的な集中力よりも、全体を見渡す判断力が重要となってくる。また、P 型人間がベストの形で出現するのが天才ということになる。

やや大げさに響くかもしれないが、M 型人間の代表として最澄、P 型人間の代表として空海を挙げた。最澄は、自らが導入した宗派（天台宗）とともに、これまで日本に導入された仏教各宗派をつぶさに研究し、極めて精緻な形で分類した功績が素晴らしいが、これは M 型が成せる業であろう。空海は、これまでの仏教各宗派のみならず、儒教・道教・神道、そのほか、欲望人の立場まで、自らのシステム（真言宗）の中に融合させた能力に驚嘆するが、これは、複線志向が如実に湧出した P 型の特徴と言えよう。

2. 「3K」とMP分類

「はじめに」で挙げた 3K で表される概念が、M タイムと P タイムとどう関わっているのかを考察し、その 3 概念を MP 分類してみる。

3K とは、「こと」と「ことば」と「ところ」であるが、「こと」は「文化」、「ことば」は「言語」、「ところ」は「心理」で代表させることにする。「言語」のマクロ的関連が「文化」で、ミクロ的関連が「心理」なので、この 3 者は極めて深い関係にある。

2. 1. Mタイム文化とPタイム文化

2. 1. 1. 文化のMP分類

1章で、人間にMタイム型とPタイム型があることを論じたが、人間がそのように分類できることは、文化も同様に分類できる可能性を秘めていることを暗示する。というのは、文化の担い手は人間に他ならないからである。だから、文化をMタイム型文化とPタイム型文化に分けてみる。(それぞれM型・P型という省略形を用いるものとする)

(4) a. M型文化： 農耕文化

b. P型文化： 狩猟文化・牧畜文化・遊牧文化

農耕文化がM型文化であると規定するのは、農業を営むのに、1つの時間軸が重要だからである。いつ種を蒔いて、いつ実が成り、いつ収穫するかなどは1年または数年を通じて決まっている。その1つの時間に左右されるものの、複数の時間に縛られることは通例でない。だから、M型であると言えるのである。

一方、動物に関わる文化は、動物のそれぞれが勝手な行動をすることから、時間軸が動物の数だけあると言っても過言ではない。狩猟文化から発展した牧畜文化でも、たとえ野生動物が家畜化されたとはいえ、やはり、時間軸は複数設定せざるを得ない側面がある。動物は、自然環境の変化に対して、植物よりも影響を受けやすいからである。というよりも、動物は一匹一匹(あるいは一頭一頭)に個性があるから、時間軸が多くなるのである。だから、動物に関わる狩猟・牧畜・遊牧文化は、P型文化ということになる。

2. 1. 2. 家庭のMP分類

文化にM型とP型があるのだから、人間が構成する家庭にもM型とP型が存在する。典型的な差は、ペットを飼っているかどうか表れる。

家畜化されたとはいえ、犬や猫を飼っている場合は、P型的になる。人間の都合だけで物事を処理できない。犬の時間や猫の時間があるのである。だから、複数の時間軸が家庭の中を流れていることになる。ペットを愛する家庭はP型家庭ということになる。

一方、ペットなどを飼っていない場合は、一般にM型的である。人間の時間軸は予想がつく。従って、ペットなどを飼わない家庭は、M型家庭ということになる。

2. 1. 3. 料理のMP分類

人間が作り出した文化には諸側面があるが、その中でも重要な位置を占める食文化についてMP分類を施してみる。

(5) a. M的料理：西洋料理

b. P的料理：日本料理

西洋料理の基本は、順番に出てくるという順序性である。典型的な西洋料理のコースは、オードブル、スープ、魚料理、肉料理、デザート、コーヒーなどの順である。1つの時間軸上を料理がきちんと動いているという感じである。

一方、伝統的な日本料理、例えば、最高級の本膳料理は、同時に5つの膳が運ばれてくる（とは言っても一の膳から順に出すのであるが）。マナーとしては「汁、ご飯、なま物、煮物、小皿」の順で一通り味わって、あとは自由ということになる。自由な部分に限れば、膳の数だけ時間軸があることになる。

もちろん現代では、このような正式料理は、会席料理に短縮され、さらに、幕の内弁当まで、最小化された感がある。幕の内弁当は、必要な食物を少しずつ散りばめてコンパクトにまとめているので、西洋料理のコースのような時間的順序性はなく、時間的には同時性が特徴である。だから、現代の日本料理の簡略版の代表格である幕の内弁当は、伝統的な本膳料理よりも、むしろ同時性が高い、すなわち P 性（=P 的である度合い）が増すと思われる。

とにかく、1つの時間軸を感じない、本膳料理や幕の内弁当に見る同時性が P 的であることは言うまでもないであろう。

2. 2. Mタイム言語とPタイム言語

2. 2. 1. 言語はそもそもPタイム的

言語が表現する言葉はそもそも漠然性を基本とする。

(6) He went there.

例えば、(6)の意味するところは、「ある男性が1人で、過去において、あるところから、この文の話し手（またはこの文の書き手）から遠ざかった別の場所へ移動した」という情報のみを伝えている。つまり、「彼」とは誰なのか、「there」とはどこなのか、具体的にいつ行ったのか、誰と行ったのか、何の目的で行ったのか、どのような交通手段で行ったのかなどは、全く分からない。その意味で漠然としているのである。

また、言葉は2つ以上の意味に取れる多義性を示す場合もある。

(7) a. 午後11時まで勉強しなかった。

b. 家内とは、そのパーティで出会った。

(7a)は、「午後11時までずっと勉強を続けたわけではない（11時前には勉強を止めた）」という意味と「午後11時になって勉強を始めた」の2つに曖昧である。これは、「11時まで」が「勉強」にかかっているのか「勉強しない」にかかっているのかという構造上（=統語論上）の違いに基づいている。

(7b)は、統語論上の構造とは関係がない多義性の例で、「家内（となる女性）と出会ったのはそのパーティでのことだった」という馴れ初めを述べる意味と、「そのパーティで、（現在の）家内と会うことにしたから会った」という約束を述べる意味で曖昧である。

漠然性にせよ、多義性にせよ、状況に応じて、意味を取らないといけないので、頭の中に複数の思考が走る（=時間軸が急に増える）ということが起こり得る。従って、言語というのは、本来的にP型傾向があると言える。

2. 2. 2. 英語と日本語の違いをMP発想で解く

2.2.1.でそもそも言語はP型傾向と述べたが、言語の種類によって、M型とP型に分類されるものかどうかを考察する。

(8) a. M型言語：英語・ドイツ語・フランス語など

b. P型言語：日本語

M型言語は、時間軸が1つということになるが、これはそもそも順序が厳しいことと関係が深い。この句の次のこの句が続くということは、時間軸が1つで順序よく述べないといけないことを意味するわけだから、語順が厳しいのはM型言語と考えてよい。英語は典型的なM型言語であろう。

ドイツ語やフランス語も語順は厳しいほうであるが、これらの言語は屈折語で、語尾が変化することで、文中での役割が分かるので、語順が崩れても意味が通りやすい。その意味では、ややM型の典型から外れる。ロシア語は屈折が充実しているので、語順を少々崩しても意味が通じやすいということなので、M型がかなり薄れていると言える。

一方、日本語は、「てにをは」を用いるのが原則なので、語順は比較的自由である。

(9) a. 私は彼と部屋でドイツ語を勉強した。

b. 彼と、私は部屋でドイツ語を勉強した。

c. 部屋で、私は彼とドイツ語を勉強した。

d. ドイツ語を、私は彼と部屋で勉強した。

e. 勉強した。私は彼と部屋でドイツ語を。

f. ドイツ語を勉強した。私は彼と部屋で。

g. 部屋でドイツ語を勉強した。私は彼と。

h. 彼と部屋でドイツ語を勉強した。私は。

(9)に挙げたように、日本は単文である限り、語順は自由である。このことは、どんな句を最初に発話すべきかは、自由で、その分だけ、時間軸が存在するということができる。つまり、日本語は、P型であると言えるのである。

日本語は、上記のように文法面だけでなく、表記法の点でもP型的言語であることも付記しておきたい。

(10) a. P型的側面：漢字（表意文字）の使用

b. M型的側面：平仮名・片仮名（表音文字）の使用

一般に表意文字は、複雑になればなるほど、複数の意味を同時に提示する。

(11) 「腰」

「腰」という漢字は、「月」で「肉」つまり体を表し、「要」（かなめ）で「重要であること」を表す。つまり、腰は体の重要な部分という意味である。

では「要」は「西」と「女」の組み合わせであるが、これは何故か？男性は、女性を守るのに女性の右側に立ったほうがよい。右手に剣を持ち敵と戦い、左手で女性を抱えて守るというわけである。現実には昔は自然と、男性が右、女性が左という立ち位置になったと

思われる。基本方位である北に向かって立てば、女性は西側にいる。従って「女が西」というのが要（重要）であるということになったと思われる。

漢字は、このようなストーリーをそのまま同時に表している。表音文字である平仮名や片仮名は単に、発音の仕方を伝えるだけなので、1つの時間軸で、順番に読んでいくしかないのであるが、漢字は、瞬間にいろいろな情報を提供する。その意味で、P的表記と言えよう。

とにかく、言葉の世界では、曖昧性と同時性はP的であると断言できると私は考えている。曖昧であればあるほど、そして、同時に意味が発生していればいるほど、P性が高くなると思われる。

2. 3. Mタイム心理とPタイム心理

2. 3. 1. 心理のP的傾向の強さ

2.2.1で、言語はPタイム的であると述べ、2.2.2で「曖昧性」と「同時性」がP性の高さを表すと述べたが、心理はもっとP性が高いと言えよう。というのは、心の中は複雑で曖昧模糊としており、いろいろなことを同時に捉える側面があるからである。

そして言葉にするときに、整理する必要がある、論理的な思考を行うのである。論理的思考は言葉として発する前の段階のM化（M的にすること）手段であると言える。

(12) ころ（P的）⇒ 心の整理（M的）⇒ 論理思考（M的）⇒ ことば（M的）
＜ころのM化＞ ＜ことばのM化＞

(12)の図式はあくまでも仮説で、今後入念な検討を要するが、これが主張することは、以下の通りである。

ころは元来P的で、このころをM化するのに「心の整理」が必要で、その後、言葉を発するのに、元来P的なことばをM化することも必要である。そのことばのM化の手段が論理思考に他ならない。

2. 3. 2. 性格や心的態度のMP分類

2.3.1.で、ころ自体がP的であると考えたが、心が直接関与する人の性質（性格や心的態度）のMP分類を試みる。

- (13) a. M的心理：自分自身に対する厳しさ、賢さ、几帳面、論理的、客観的
b. P的心理：人に対する優しさ、思いやり、いい加減、感情的、主観的

1つの時間軸上を、順序を決めて、物事を行うのにふさわしい性格は、「厳しさ」であろう。時間を守るためには、少なくとも時間に対して厳しい考えを持たないといけない。そして、几帳面で論理的にして客観的な思考をする必要がある。M的な人間は、もちろん、このようなM的な性格を持ち合わせているであろう。

人間関係を大切にするP的な人は、他人の時間軸に合わせるのであるから、「優しさ」がキーワードということになる。計画における几帳面さは重要ではなくなり、計画に対して

はいい加減さが目立ち、嬉しいことや悲しいことを素直に表現できる感情の豊かな人間で、主観的な発想も持ち合わせている。それが P 的な性格であろう。

2. 3. 3. 心の最高の状態と M 性と P 性

心の最高の状態を仏教的な言葉で言うと、「仏陀」の境地、すなわち「悟り」ということになる。悟りは M 的なものなのか、P 的なものなのかを、ここで簡単に論じておきたいと思う。

結論から言うと、悟りは、M 的な心的態度と P 的な心的態度の両側面を持ち、それを止揚した（アウフヘーベンした）ものである。

確かに、悟りの達成者としての仏陀は M 的なもの（智慧）と P 的なもの（慈悲）が 2 大特質と捉えてよい。この 2 者（賢さと思ひやり）を統一して、更に高いレベルにしたものが、仏教の言う悟りということではないであろうか。

3. 宗教の MP 分類

2.1.1. で文化を MP 分類したが、文化に大きな影響を与える、いや、文化そのものの中核に位置する宗教も MP 分類できると考えるのが、妥当であろう。

3. 1. 一神教と多神教

まず、神の存在論的な視点からの MP 分類を試みる。

(14) a. M 型宗教：一神教（ユダヤ教、キリスト教、イスラム教）

b. P 型宗教：多神教（神道、道教、ヒンドゥー教）

一神教は、唯一全知全能の神以外の神を認めない宗教であるから、その神が創った時間は 1 つで、1 つの時間軸に沿って全ての事象が動いていると発想する。まず、時間が、その神の創造行為とともに始まるのである。そして、聖書の終末論で語られる通り、終末を迎え、最後の審判を迎え、神の国が建設されて、全てが終結する。

(15) 天地創造 ⇒ 終末 ⇒ 最後の審判 ⇒ 神の国

キリスト教の教えでは、終末を迎えた後、殉教者や敬虔なキリスト教徒が復活して至福の千年王国を過ごすことになるが、それでも、最後の審判はやってくる。1 つの時間軸で全てが行われる。複数の時間があるわけがない。時間が複数あるとややこしいし、そもそもそんな発想はしない。一神教は典型的な M 型宗教であるということは間違いないであろう。

一方、多神教は、神を複数認める。この宗教の特徴として、仮に創造の神がいても、この創造の神が複数いるということはない。だから、宇宙全体のみならず、宇宙の法則までも創造するという全知全能の神は普通存在しない。それで、時間軸が 1 つであると発想しない。むしろ、神の数だけ時間軸があると考えすることはできないであろうか。

日本でも、神を祀る祭りの行事が、神によって異なる。複数の神を信仰することは、それぞれの行事に、自らのスケジュールを合わせないといけない。そのこと自体、時間軸が

複数あるということに他ならない。よって、多神教は P 型宗教であるということになる。

3. 2. 仏教と M タイム・P タイム

3. 2. 1. M 型宗派と P 型宗派

3.1.で、一神教が M 型宗教、多神教が P 型宗教であると述べた。日本人になじみがある M 型宗教はキリスト教、P 型宗教は神道ということになる。それでは、日本人にとって、生活や考え方の中に溶け込んでいる仏教はどうであろう。

仏教は一般に、全てを包含する側面がある。分類しようと思っても分類自体が難しい場合が多い。例えば、仏教は、一神教ではないようであるが、はっきりと多神教であるとも言えない。というのは、仏教には、仏教と仏陀を守るべき神が複数いるものの、如来や菩薩も存在する。如来や菩薩は正確には神ではないし、密教（仏教の中でも真言宗や天台宗）では、全ての存在は大日如来に帰着するとする。その意味では一神教（いや一仏教）的側面もある。

私は、仏教自体は、MP 分類できないものの、仏教の宗派が MP 分類できるのではないかと考えている。

(16) a. M 型宗派：浄土宗、浄土真宗、時宗、融通念仏宗・・・念仏系

b. P 型宗派：真言宗、天台宗・・・密教系

念仏系は、他の仏も認めるものの、阿弥陀仏にすがることが最重要視するので、一神教に近い側面がある。時間軸は阿弥陀仏の救いに基づき存在している。

一方、密教は、曼荼羅に多くの神仏が描かれているように、多神教的要素が強い。それぞれの神仏に真言（マントラ）が存在する。大日如来により統一されるという教義があるものの、それぞれの独自性も保たれている。完全に大日如来に統一されるのであれば、他の神仏を一切認めない一神教となるが、神仏を認めないどころか、その個性を重視している。従って、時間軸は神仏の数だけ存在すると言っても過言ではない。

禅は教義的には、M 的でも P 的でもないと思われる（つまりそれを超越している）が、修行的には M 型宗派的であろう。時間にも厳しく、行動も厳しい側面が目立つからである。

日蓮系は、神仏の存在論的には、M 的とも P 的とも規定しにくいですが、法華経を元に全てが回っているため、法華経の元、時間軸は 1 つと思われる。そこで M 型宗派的と言えそうである。

3. 2. 2. 密教を MP 分類する

さらに、密教である真言宗と天台宗の差が微妙にある。私は、次のように、2 つの観点で、2 者が MP 分類できると考えている。2 つの観点とは、教義の観点と神仏の存在に関する観点である。

(17) 教義的観点と神仏の存在論的観点による密教のMP分類

	教義的観点	神仏の存在論的観点
M型密教	真言宗	天台宗
P型密教	天台宗	真言宗

(17)で、教義的には、真言宗がM型であるのは、真言宗では、真言宗をトップに、華嚴宗や天台宗、さらには道教や神道、儒教までも、そして欲望人の立場をも取り込んだ、空海の一大精神システム（十住心論）を構築しており、時間軸は、このシステムにより1つに統一されていると言えるからである。

一方、天台宗では、これまでの宗教を分類検討し、批判を加え、円密禪戒（円とは法華経）という4つに絞った形で、南都六宗は排除した。この時点で、南都六宗に別の時間軸を認め、円・密・禪・戒も独立している（互いに溶け合っているのではない）ので、それぞれに時間軸があると考え、P型密教ということになる。

しかし、神仏の存在論的観点から分類すれば、ちょうど逆になる。天台宗では、円密禪戒のうち、円（法華経）を重視する。となれば、日蓮系と同じように、法華経を中心に時間が動いていると考えてよいので、M型密教ということになる。

一方、真言宗は、単に、菩薩や如来のみならず、大日如来の化身である不動明王という全く、存在論的に異なる存在も重視する。従って、P型密教ということは間違いのないであろう。

4. MP交代仮説

これまで1章から3章を通じ、様々な事象のMP性（M型かP型のどちらの性質を持っているかということ）を論じてきた。それらが正しいとすると、不整合が生じるケースが出てくる。本章では、その問題の詳細と、その解決に向けた仮説を、議論し提案することにする。

4. 1. 文化のMP分類と宗教のMP分類の不整合

2.1.1.でM型文化を農耕文化、P型文化を狩猟・牧畜・遊牧文化とした[(4)参照]。一方、3.1.でM型宗教を一神教、P型宗教を多神教と考えた[(14)参照]。

すると、一般に農耕文化に多神教が現れ、狩猟・牧畜・遊牧文化に一神教が現れるという流れが不整合になる。なぜなら、文化と宗教でMP性が異なるからである。

これはどういうことなのかを説明できなければならない。そこで、「MP交代仮説」を提案する。

(18) MP交代仮説

- a. Mタイム性を示す環境は、Pタイム化する可能性を秘めている。
- b. Pタイム性を示す環境は、Mタイム化する可能性を秘めている。

(18)において、Mタイム性とは「Mタイムの性質を持っていること」、Pタイム性とは「P

タイムの性質を持っていること」、Pタイム化とは「Pタイムの性質を持つようになること」、Mタイム化とは「Mタイムの性質を持つようになること」を意味している。これらをそれぞれ、タイムを省略し、M性、P性、P化、M化と呼ぶことにする。

さて、(18)が正しいとすると、次のことが、文化と宗教という2大事象について言えることになる。

(19) a. M性文化には、P性宗教が生まれる素地を持っている。

b. P性文化には、M性宗教が生まれる素地を持っている。

注：これまで用いた「型」と「性」は置き換え可能。種別を強調すると「型」、性質を強調すると「性」という語が用いられる。

(19)は具体的には、(20)と同じことになる。

(20) a. 農耕文化からは多神教が生まれる。

b. 狩猟文化・牧畜文化・遊牧文化からは一神教が生まれる。

(20)は経験的にも学問的にも、一致した見解であるから、(18)が正しいとすると矛盾はなくなる。

ここで、(20)が正しいことを示す分析を紹介しつつ、M性とP性、P化とM化の関わりを述べてみる。

農耕文化は、豊かな土地にしか生まれえない。つまり、自然が人間に対して厳しい(M性自然)ところからは生まれえない。逆に、資源が豊富(P性自然)から生まれることになる。一方、狩猟文化や牧畜文化、または、遊牧文化の自然は、基本的には厳しい環境、主として砂漠地帯(M性自然)である。つまり、自然が豊か(P性自然)なところからは生まれえない。豊かな地域では農業が営まれるからである。環境が厳しいからこそ、農耕はできず、動物に関わる文化が生まれるのである。事実、砂漠地帯に遊牧が見られる。つまり、次のようにまとめることができる。

(21) a. P性自然(豊かな自然) ⇒ M性文化(農耕文化)

b. M性自然(厳しい自然) ⇒ P性文化(狩猟文化・牧畜文化・遊牧文化)

農耕文化は1つの時間軸で生活することになる。すると、自然が厳しいわけではないので、絶大な能力と権力を持つ神は不要で、実りをもたらしてくれる神、家族を安泰にさせてくれる神、農業の担い手としての子供を授けてくれる神、旅に出ると農業の担い手が減るので、旅の安全を確保してくれる神など、個々の神が必要となってくる。つまり、自然に多神教(P性宗教)が生まれてくるのである。

一方、自然環境の厳しいところに発生した文化は、動物を主体とするので、時間軸は人間と動物の少なくとも2つ、また、動物の種類や数により、もっと増える可能性を秘めている。そこには、自然環境の厳しさから、強い指導者が必要となり、しかも、動物全般を治めてくれる唯一神を掲げる一神教(M性宗教)が生まれる素地がある。

従って、これまでの議論をまとめると、次のようになる。

- (22) a. P性自然 ⇒ M性文化 ⇒ P性宗教
b. M性自然 ⇒ P性文化 ⇒ M性宗教

4. 2. 言語におけるP傾向のM化

4. 2. 1. コミュニケーションの機能

2.2.1.で、言語のP性(曖昧性)について強調した。曖昧性には、漠然性と多義性があり、言語が表す表現そのものは、本来的に漠然性を備えている。コミュニケーションの目的は、その漠然性を必要なだけ、減らすことにある。従って、次のように図式化できる。

(23) コミュニケーションの機能： 言語表現のP性 ⇒ 言語表現のM化

コミュニケーションが成立するという事は、元来P性の強い相手からの言語表現をより分かりやすくするために質問の形式で、漠然とした領域を明確にしたり、また、相手に伝えたい内容を明確にするため、具体的な説明をしたりすることを意味する。その際、コミュニケーションは、P的傾向が強い言語表現をM性の強いものにするという機能があると言ってよい。

4. 2. 2. 文法の機能

一般に、多民族が集まっている国や共同体には、その民族のP性を制御するために、法律(M的システム)を強化する必要がある。

同様のことが、言語に対する文法にも言えるのではないかと、私は考える。つまり、次のような図式が存在すると思われる。

(24) 文法の機能： 言語構造のP性 ⇒ 言語構造のM化

(23)で、コミュニケーションは、P性の言語表現をR化する機能を持っていると述べた。文法の機能は、言語構造のM化と言える。言語の単位である単語を並べることで、文が成立するのであるが、それだけなら、意味が成立しない。その単語の関係におけるルールが与えられないと、文は曖昧どころか、混沌としている(P的状态)ことになる。文法が単語の関係を明確にし、意味を成立させていると言える。だから、文法は、言語構造を明確に(M化)する機能があると考えてよいだろう。

4. 2. 3. 心と言葉の関係とMP性

2.3.1.で述べたことを整理しておきたい。心は既に論じたようにP的なものであるが、人にメッセージを伝えるとき、その伝えたいメッセージは何なのか考える必要がある。つまり、心の中を明確にする必要がある。このような心の整理により、「こころのM化」を行うのである。

言いたい内容が絞り込めれば、それを、どのような言葉を用いて、どのような論理展開をすべきかを考える必要がある。言葉がそもそもP的なので、このような論理思考は「ことばのM化」につながると言える。

以上のことから、(12)は、(23)や(24)と同じように、次のような図式で書き換えることができる。

(25) a. 心の整理の機能： ころのP性 ⇒ ころのM化

b. 論理思考の機能： ことばのP性 ⇒ ことばのM化

5. MP交代仮説の展開

4章でMP交代仮説について提案したが、このM性とP性が、具体的に複数展開する事象に「歴史」と「産業」が挙げられるのではないかと、私は考えている。この2つを本章で取り上げることにする。

5. 1. 歴史とMタイム・Pタイム

MPは複数回交代する可能性を秘めている。これは、歴史の流れに当てはまるのではないかとと思われる。

例えば、日本史では、次のように、MP交代が起こっているのではないかとと思われる。表にしてまとめておく。Mタイム的な時代をM期、Pタイム的な時代をP期と名づける。

(26) 日本史におけるMP交代

時代	MP性	その理由
縄文時代	P期	狩猟文化が中心なのでP的
弥生時代	M期	農耕文化が栄えるのでM的
古墳～飛鳥時代	P期	小国の数だけ時間軸が存在するのでP的
奈良時代	M期	律令制度で時間軸を1つにするのでM的
平安時代	P期	貴族（P的）が主導権を握る
鎌倉時代	M期	武士（M的）が主導権を握る
南北朝時代	P期	南北の2つの時間軸が生じる（P的）
室町時代前期	M期	再び武士（M的）の政権が起こる
室町時代後期	P期	8代義政は貴族的（P的）な側面を持つ
戦国時代	P期	戦国大名の数だけ時間軸があるのでP的
安土桃山時代	M期	時間軸を統一することを目指すのでM的
江戸時代	M期	鎖国により日本基準に統一するのでM的
江戸時代末期	P期	ペリー来航により国が二分するのでP的
明治時代	M期	天皇中心の中央集権国家となるのでM的
大正時代	P期	個人重視のデモクラシーの芽生えはP的
昭和時代	M期	戦後復興に一致団結は武士的精神でM的
平成時代	P期	価値観が多様化する現代はP的

注：歴史なので、P性を中心とする時代はP期、M性を中心とする時代はM期とする。

統一性（純粋性）を重視するのか、多様性（寛容性）を重視するのかによって、その時代が M 期なのか、P 期なのかが決まるものと考えてよいだろう。そして、歴史は、これを繰り返すのが、その本質ではないかと考える。少なくとも、日本史にはそのような傾向があると思われる。

5. 2. 産業と M タイム・P タイム

産業については、歴史ほどでないにしても、M 性と P 性が繰り返される。(21)で述べたように、自然の P 性に対して文化の M 性が言えるのであるが、文化は経済に支えられる。経済はもっとダイナミックな動きをするのではないかと考えることができる。経済の具体的基盤は、産業である。この産業の発展に応じ、MP 交代を繰り返すと考えることはできないであろうか。次の表に、その仮説を示すことにする。

(27) 産業と MP 交代

産業	MP 分類	その理由
狩猟・採集・漁業	P 段階	動物に関わるので、その種類だけ、また、同種類ならその数だけ時間軸が存在する
農業	M 段階	植物については、太陽の運行に伴う季節の循環という比較的単純な時間が 1 つある
工業	P 段階	物には様々な種類があり、工程もそれぞれ異なるので、時間軸も豊富に存在しうる
商業	M 段階	物やサービスの売買は、金という 1 つのスタンダードで行われるので時間軸は 1 つ
情報産業	P 段階	情報は、洪水のごとく存在し、多様性に満ちていて、1 つの基準で判断できない

つまり、産業が発展するとともに、P と M は入れ替わるということになる。

6. まとめに代えて・・・能力開発と M タイム・P タイム

時間という概念にかかわる「M タイム」と「P タイム」を様々な角度から論じてきたが、理想的な時間観念のあり方を模索することは意味のないことではないと思われる。つまり、時間を大切に、計画通り物事を進める M タイム型人間がよいのか、時間よりも人間関係を重視し、少々いい加減だけれど人間味のある P タイム型人間がよいのか、あるいは、現代のビジネス界や学会・芸術家では、どちらのタイプが望ましいのかなど、考えることは意味があると思われる。

それぞれのタイプの人間の長所と短所を比べ、理想的な MP の視点から、理想的な人間像を考えてみることにする。このようなことを考えてみることは、究極的には、能力開発に生かせるのではないかとと思われる。

(28) M タイム人間と P タイム人間の長所と短所

	M タイム人間	P タイム人間
長所	時間に正確 計画的・几帳面	人間関係を大切にする 寛大・同時に色々できる
短所	神経質・怒りっぽくなる 1つのことしかできない	人に迷惑をかけてしまう いい加減・約束を忘れる

M タイム人間には、時間軸が1つなので、ある一定の時間に1つの仕事しかしない。与えられる仕事が多すぎるとパニックになってしまう。また、正確に仕事をしたいタイプなので、急を要する能力以上の仕事を頼まれると「できない」と判断してしまう。つまり、与えられた時間に一定量の仕事しかできない。しかし、適量の仕事だと、時間を守り、しっかりとしたよい仕事をする。

P タイム人間は、時間軸が複数あるので、いろいろな仕事を同時にこなせる素地がある。但し、1つ1つの仕事はややいい加減であるが、全体としてはそれほど悪くはない場合も多い。多くの仕事を与えられても、「できるかも」と判断し、適当であるがこなしてしまう。

だから、M タイム人間の緻密さを持ち、P タイム人間のおおらかさを持つ人間が望ましいのではないかと思われる。

P タイム型発想(=人望があり、寛大な発想を持つ)で、M タイム型行動(=信頼できる行動)をとる人間は、ビジネスの世界では必要な人材であると言えるであろう。また、M タイム型発想(=緻密な職人技を磨くべく修行する気持ちを持ち)で、P タイム型行動(=形にとらわれない自由な活動)をとる人間は、芸術家や科学者の世界で重要な人材かもしれない。

また、これまでに、私は、比較文化論的エッセイ(『『重なり志向』の日本文化』、『『重なり』志向と『分かれ』志向』、『日本人の精神性における重層性と宗教』など)を書いてきたが、このM タイム性とP タイム性は、ちょうど、それぞれ「分かれ志向」と「重なり志向」と並行的であると考えられる側面もある。

時間軸が一つ(M 的)だとすると、その軸上にある2つのものは、重なることができない。2つの点が1つの線を動くとする、重なりを避けるならば、必ず、離れていく、つまり、「分かれ志向」となるのである。一方、時間軸が複数ある(P 的)と、複数のものが自然に同じ時間に重なり合うことを許す。

いずれにせよ、M タイムとP タイムという時間観念は、広がりや深みのあるコンセプトで、今後さらなる研究の余地のある問題であると私は考えている。

参考文献

Hall, Edward (1977) *Beyond Culture, Anchor; Reissue* 版。

石井隆之(2009)「『重なり志向』の日本文化」『言語文化学会論集』第33号、195-227。

石井隆之(2010a)「『重なり』志向と『分かれ』志向」『言語文化学会論集』第34号、249-62。

石井隆之(2010b)「日本人の精神性における重層性と宗教」『言語文化学会論集』第35号、23-33。